

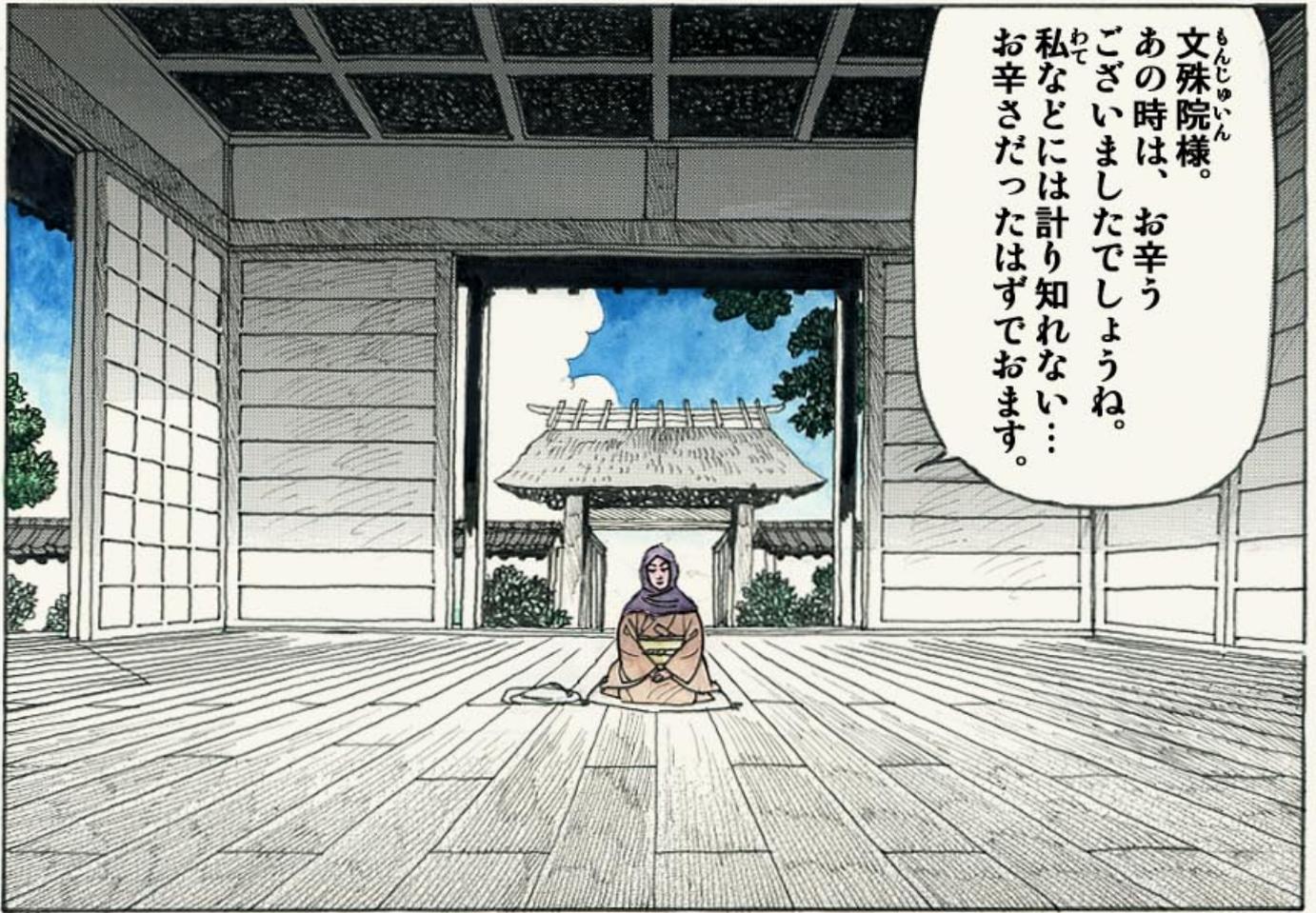
住友四百年

源 泉



第二話「炎上」

作:西ゆうじ画:長尾朋寿



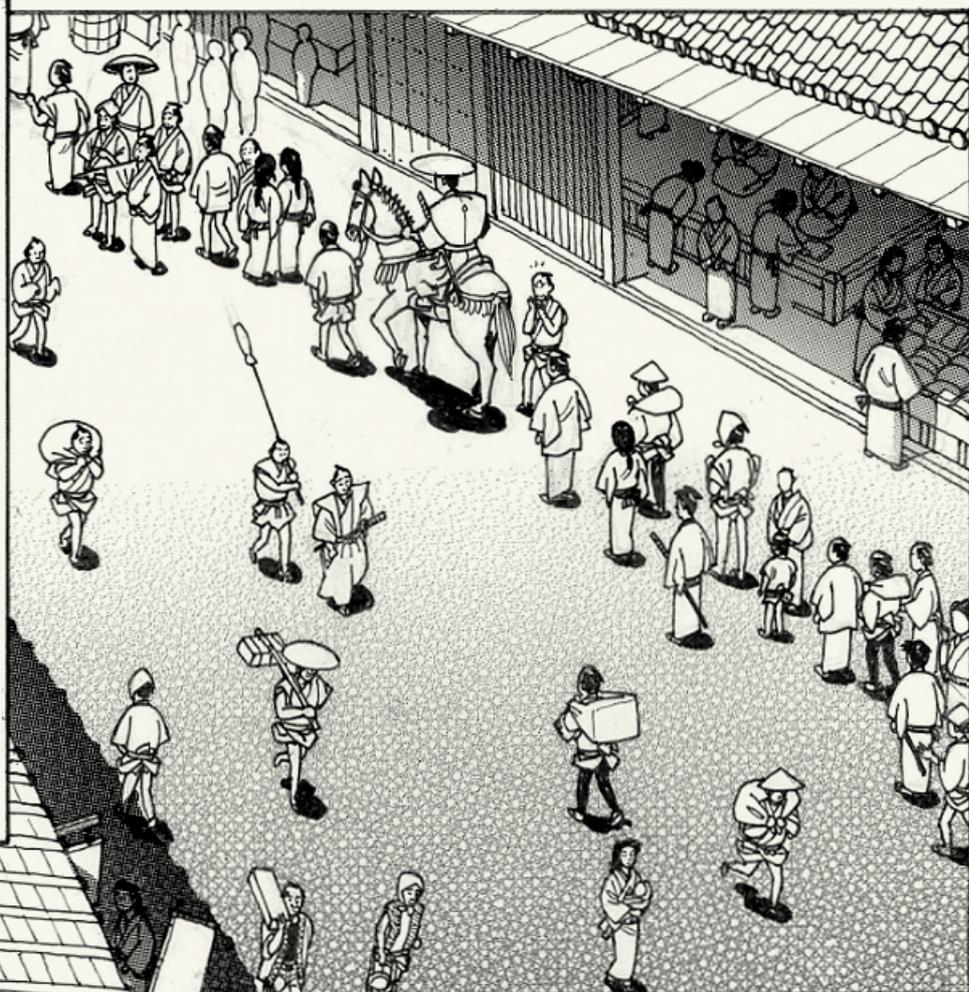
もんじゅいん
文殊院様。
あの時は、お辛う
ございましたたでしようね。
私^{わて}などには計り知れない…
お辛さだったはずおます。



あの時と申しますのは、
文殊院様が十二歳で越前丸岡から
上洛され、武士も
住友小次郎政友という名も捨て、
涅槃宗開祖・空源様^{くうげん}に出入りし…
二十年程経った、
元和三年(1617)に起きた
棘^{とげ}の道の如き法難のことでございます。

◎この作品は、住友の歴史を参考にして創作された物語です。◎

戦国の乱世が終わり、徳川の世に移った頃、
法華経と涅槃経を二大教典として
「お釈迦様の根本に戻ろう」という
涅槃宗の教えに、多くの人々が
救いと新世に生きる喜びを見いだされ、
信者となられたのです。



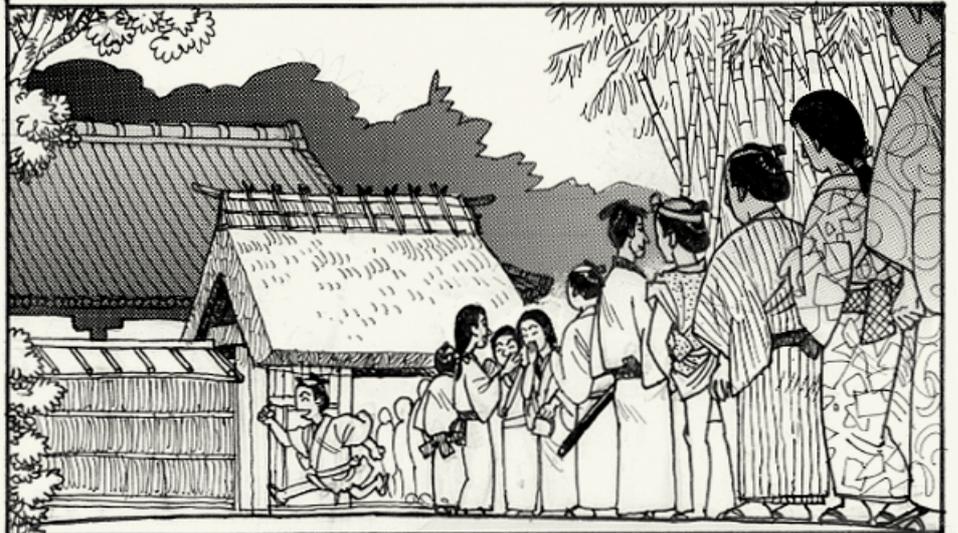
そこには空源様のお導きと
身を粉にした文殊院様の奉仕、
そしてお二人の懸命なる布教活動が
あったからに他なりません。
諸大名から合力米を贈られたり、
竹中采女、黒田筑前、有馬玄蕃、稲葉壺岐、
片桐市正、伊丹因幡のお大名は、
とくに入魂されておられたと聞きます。



そして、後陽成天皇も庇護され、
空源様は「及意上人」という
御名を賜りもしております。



その及意上人様は、
文殊院様を第一の弟子とし、
二つ無きものと親しみ愛し、
法教伝授はひとつも
残さず伝える、
次の教祖にしたい人間だとの
お考えでした。



…ゆ、許せぬ。
新興の涅槃宗が
あんなに信者を
集めるなんてッ。

ほんまや。
堪忍ならん。





涅槃宗は邪教でおます。
京都所司代の板倉様に
訴えて廃宗にせんと
あきまへん。



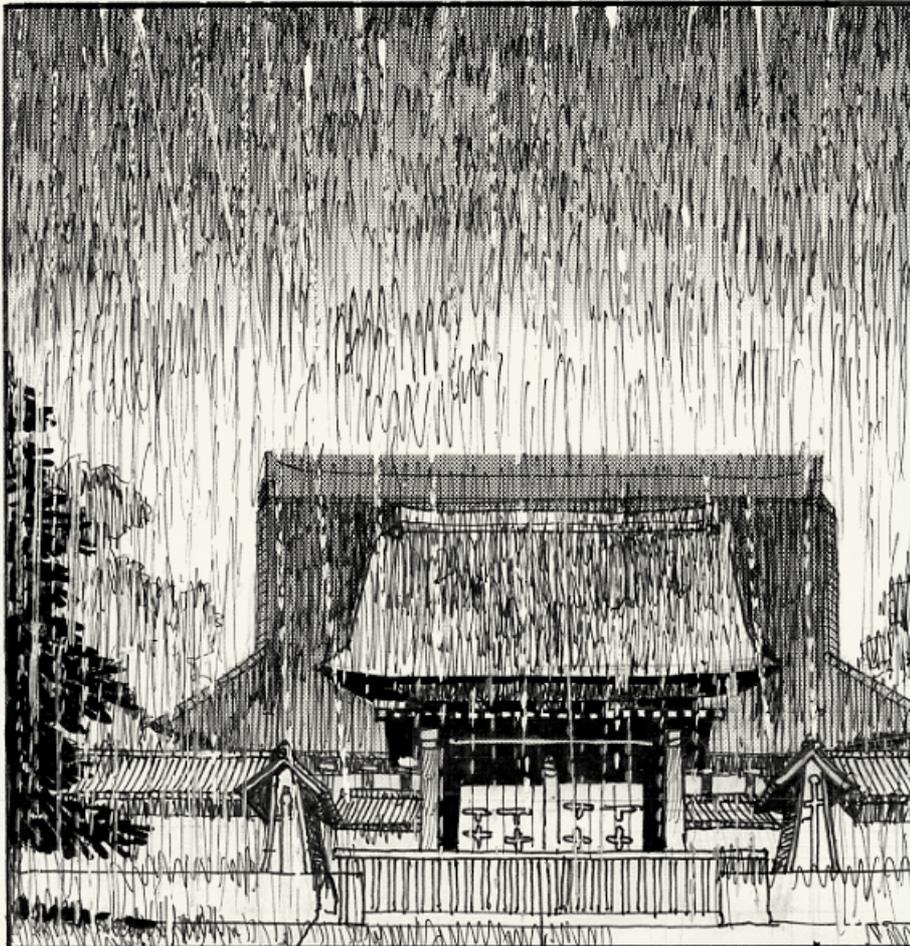
その気持ちはわかるが、
後陽成院が庇護されて
おられるゆえ、所司代も
御聞き取りにはならん。

悔しいッ！

しかし今に見ている。
何としても…
何としても…
涅槃宗など
死滅させてやる。



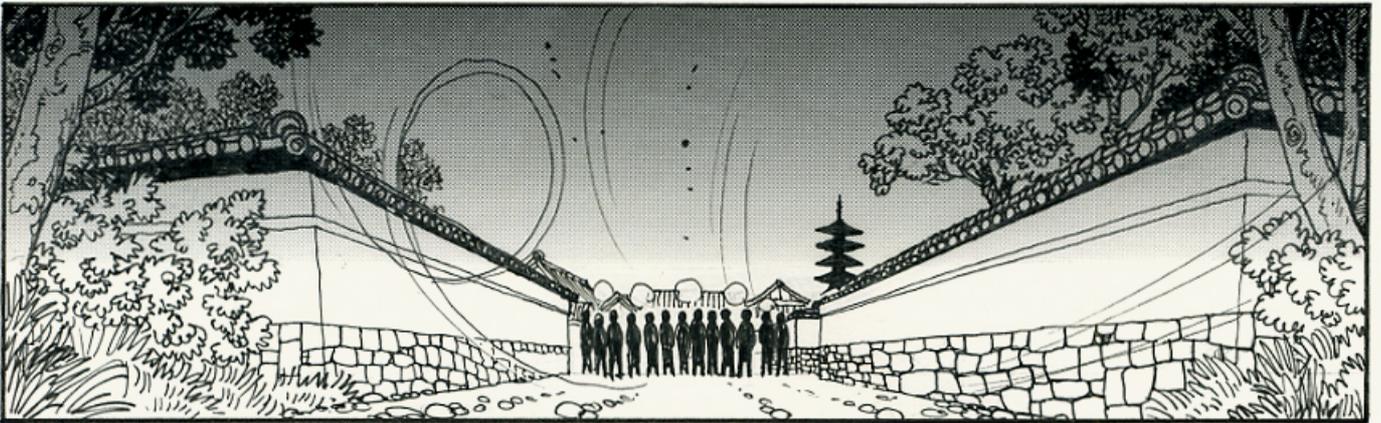
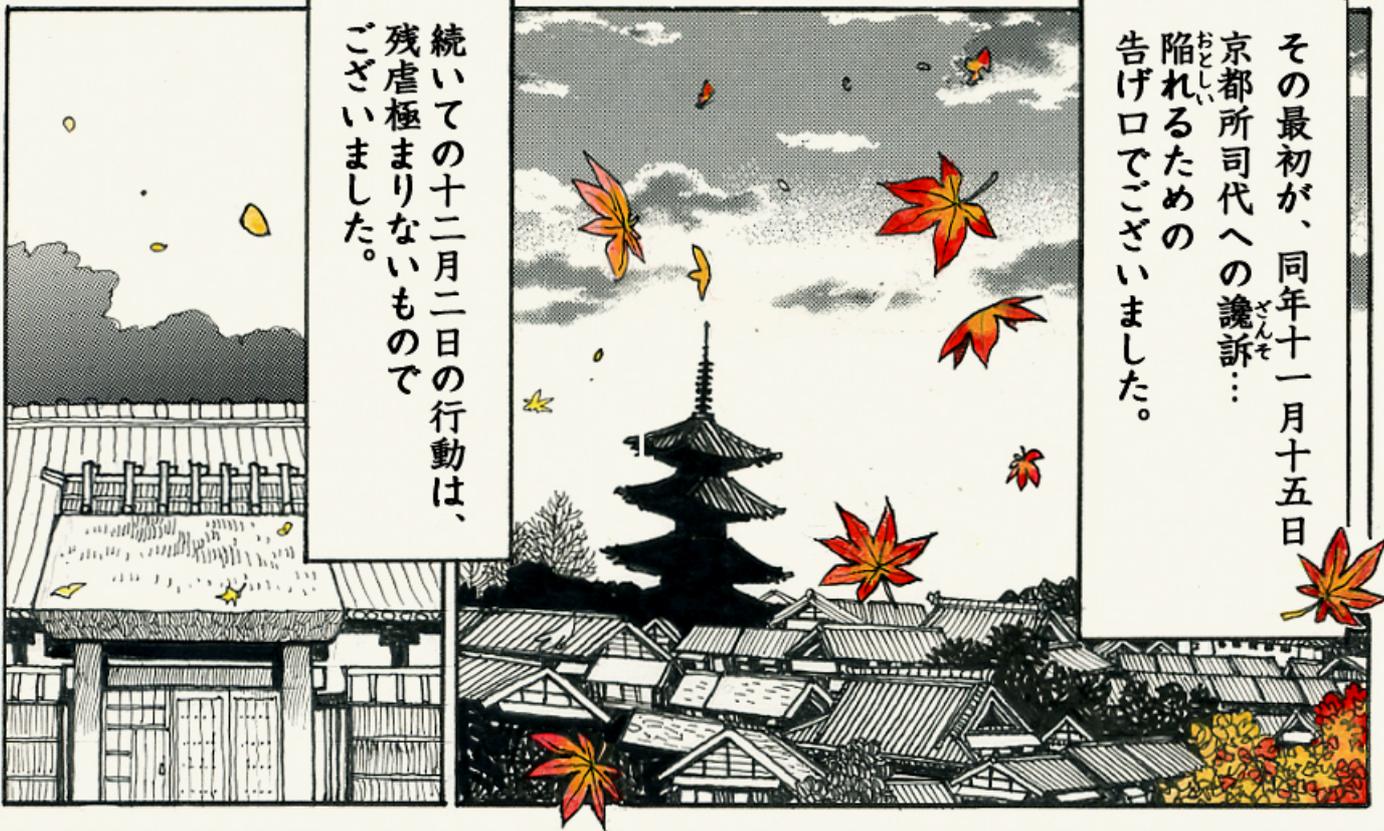
いつの世も、
出る杭は打たれる…
兎角、
他から憎まれるもので
涅槃宗は正にその矢面に
立たされていたのです。



そして、その年…元和三年八月末。
最大の庇護者でおあした後陽成院様が
御隠れ(崩御)になられると、
涅槃宗を忌み嫌い、憎む、
他宗派たちが堰を切ったように
行動を取ったのでございます。

その最初が、同年十一月十五日
京都所司代への讒訴：
おとし、
陥れるための
告げ口でございました。

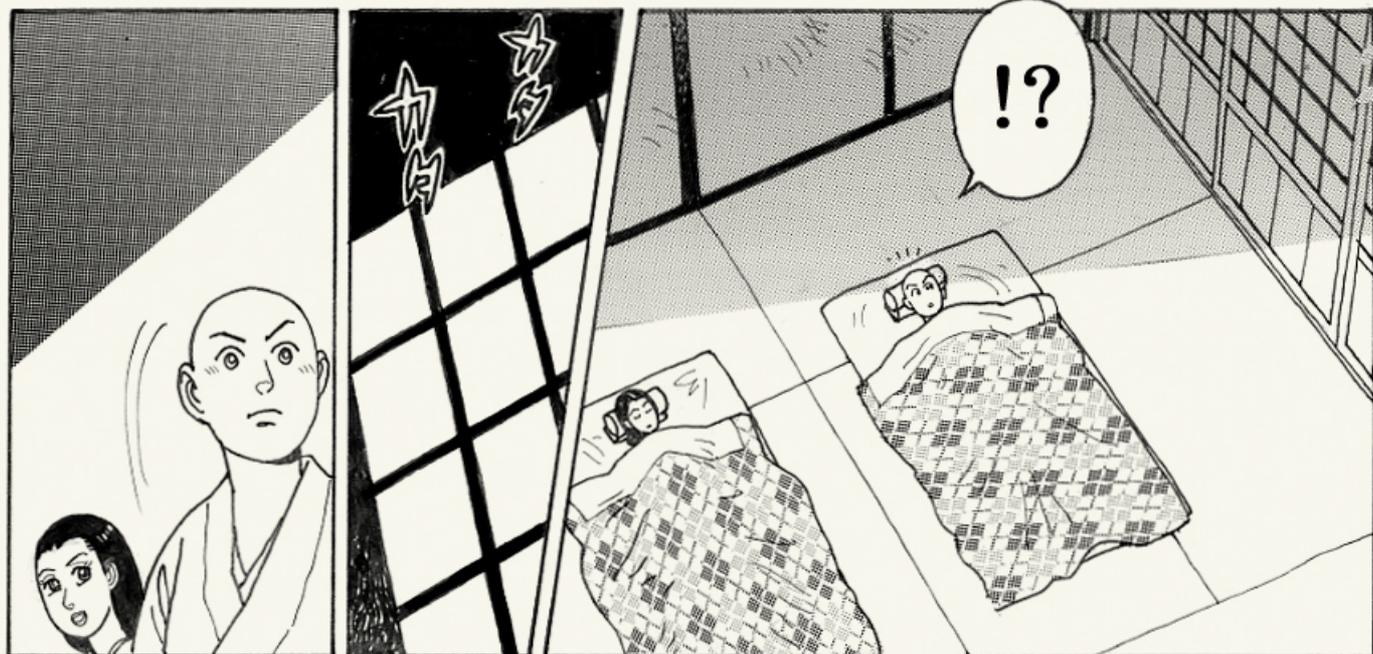
続いで十二月二日の行動は、
残虐極まりないもので
ございました。



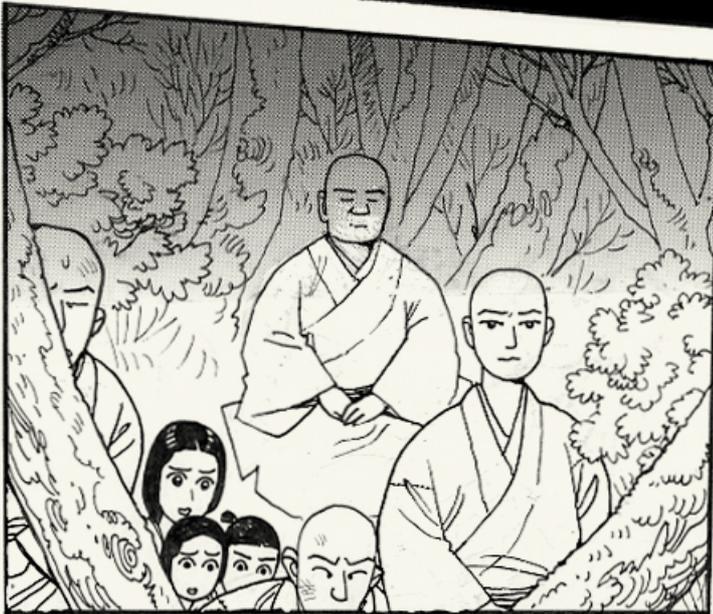
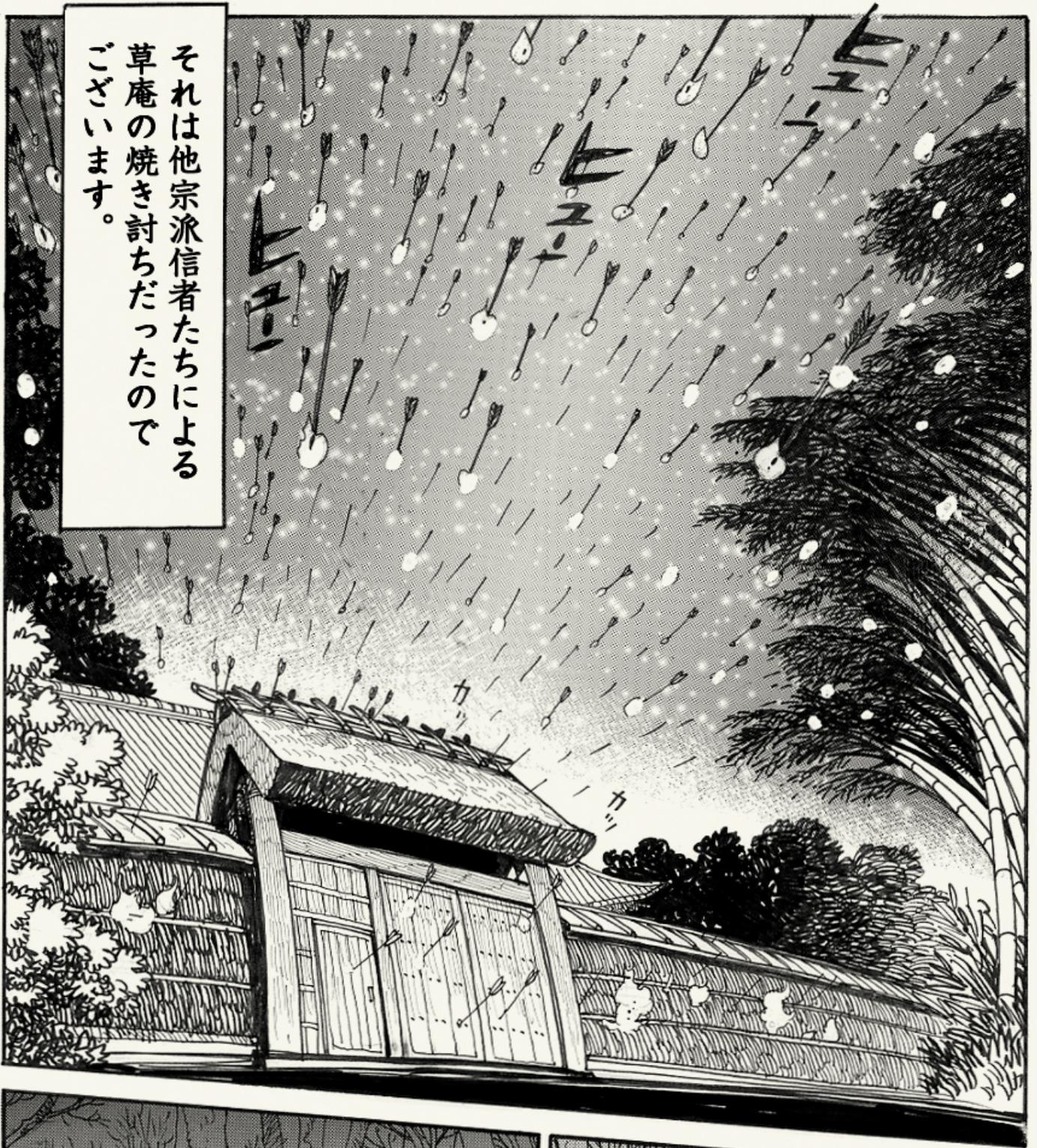
これなる
涅槃宗は邪教なり！
地上より
抹殺するべし！

お
お





それは他宗派信者たちによる
草庵の焼き討ちだったので
ごさいます。



御上人様。
他宗派の方々は、
我が涅槃宗の教えを
勘違いされておる
のでございます。

うん。
邪教とな。

はい。しかし、
このままに
しておいては、
涅槃宗の存続ばかりか
京の町の治安も乱れ、
人々の生活が
脅かされます。

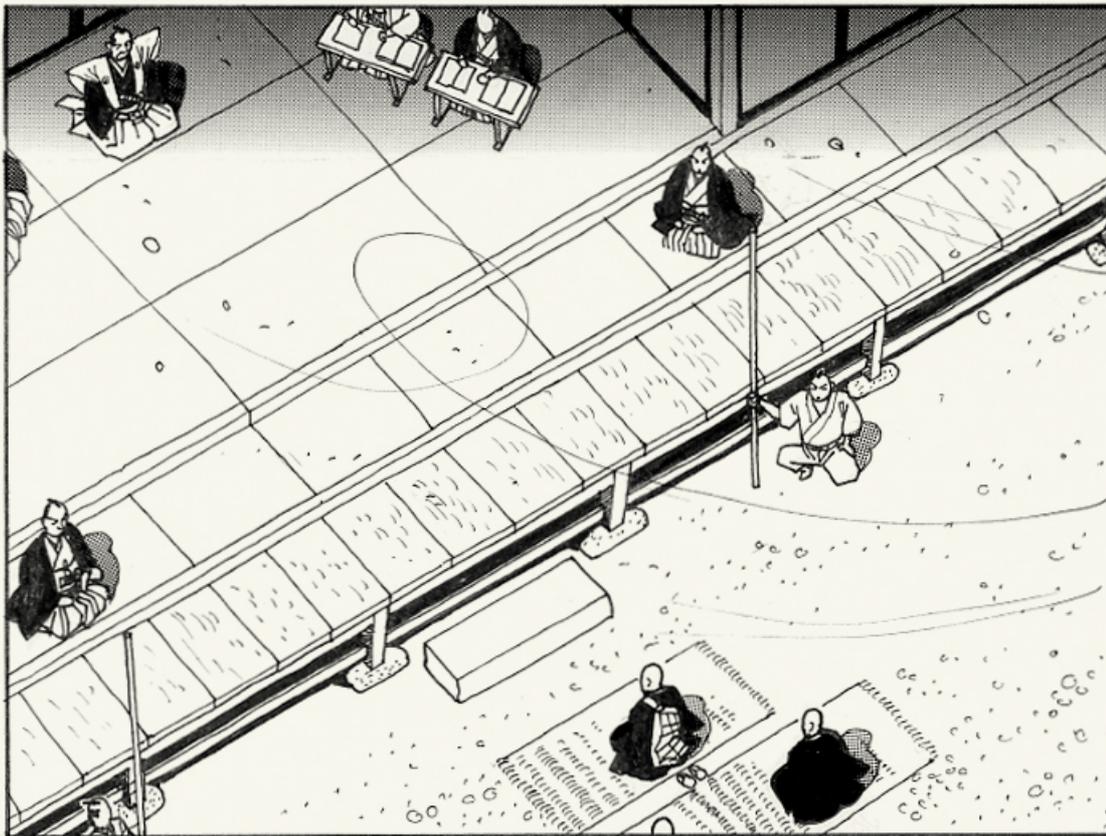
うむ。

京都所司代の板倉に、
涅槃宗は正しい仏の教えを
行っている宗派であることを
弁明し、他宗派との軋轢を
和解へ導いて頂きとう
ございます。

ではその大役を
そなたがやって
くれるのだな、
空禅法師。

はい。
微力ながら
身命を懸けてまして！

すくさま
直様。文殊院様は、
教祖・及意上人の名代として、
京都所司代・板倉勝重様のもとへ参り…。

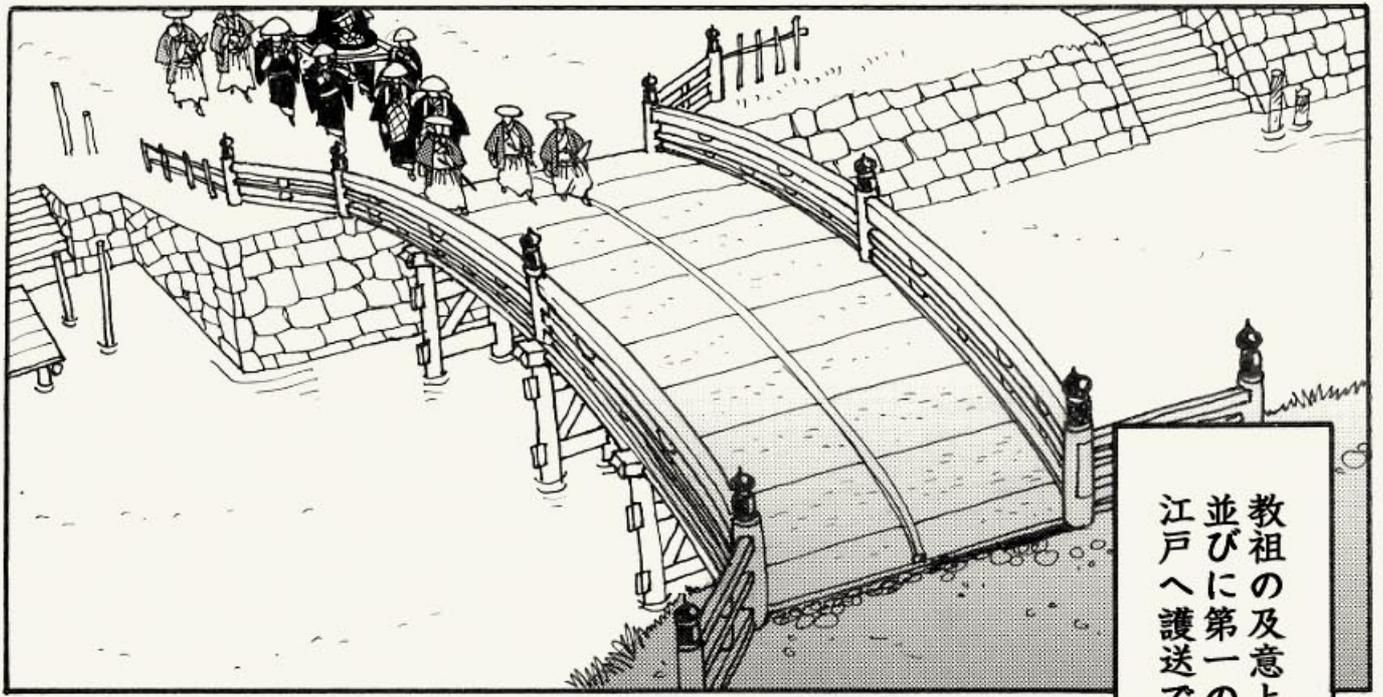


お釈迦様は、
宗派をお唱えには
なりませんでした。
その御考えはひとつ
なのでございます。

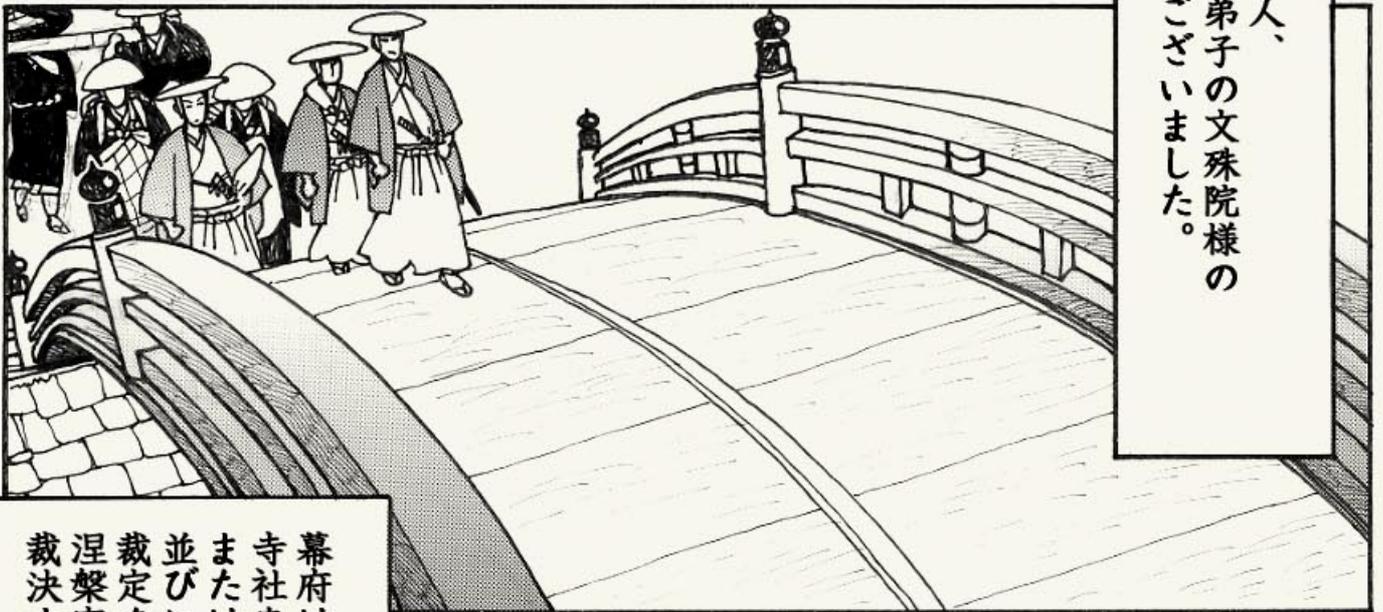
ただいま我が国にある
宗派はすべて、
釈迦一仏から出たもの
他なりません。

我が涅槃宗も、
お釈迦様の御教えを
正しく行っておりませぬ。
どうぞ、ご理解下さり、
他宗との軋轢を無くし、
世の人々に平穏な生活を
御与え願います。

その文殊院様の
切なる願いに対し、
幕府が取った態度は…

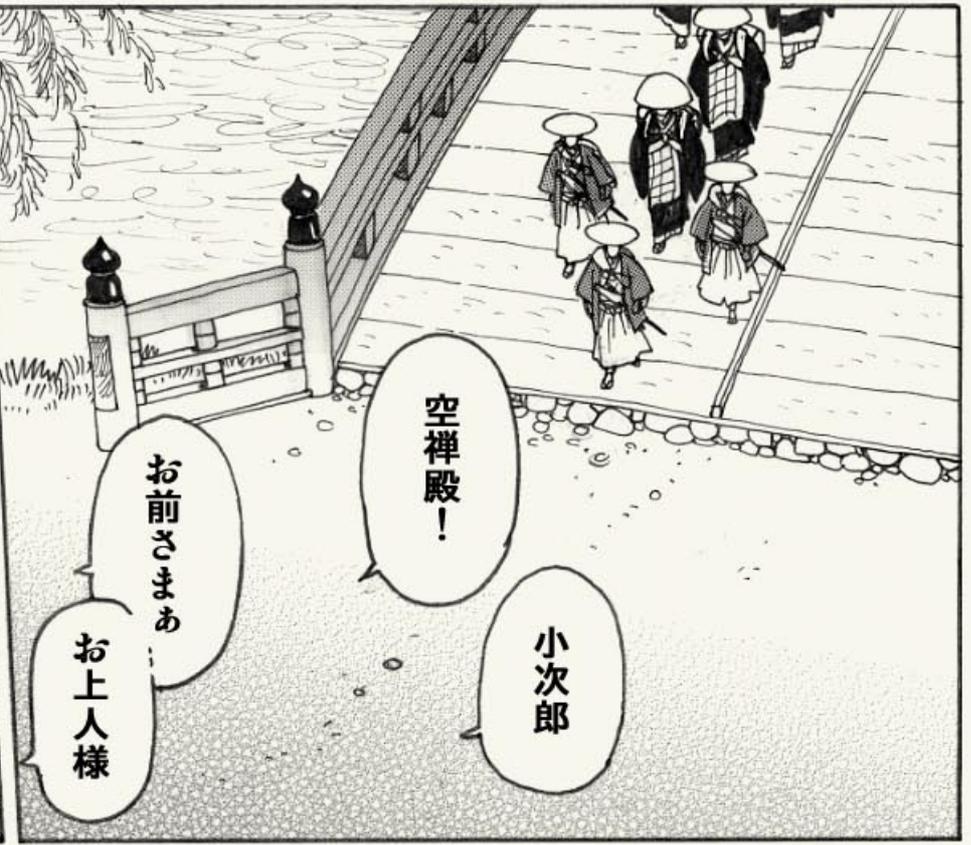


教祖の及意上人、
並びに第一の弟子の文殊院様の
江戸へ護送でございました。



幕府は江戸において、
寺社奉行所、
または寺社、町、勘定の三奉行
並びに老中を加えての
裁定をなす評定所で、
涅槃宗の扱いを最終的に
裁決することとしたのでございます。





お前さまあ
お上人様

空禅殿!

小次郎



お願い申します、
お役人殿。
見送りの者と
しばしの別れを
致したく存じます。





今生の別れと
なるやもしれん。
別れを惜しめ。
ただし、
ほんの少しだぞ。

ありがとうございます。
ごさいます。



義兄者人に
姉様まで、
お見送り
痛みいります。

いや、当然の
こととおます。
空禅殿。

なにことも銭が
ものを言うのが
世の中でおます。
お持ち下さい。

…義兄者人…



その当時、涅槃宗には
京に強力な信者様たちが
いらっしやいました。
その一人が銅吹屋(銅精錬業者)の
蘇我家「泉屋」で、
その当主の理右衛門様に
文殊院様のお姉様の周栄様が
嫁がれてもいたのです。

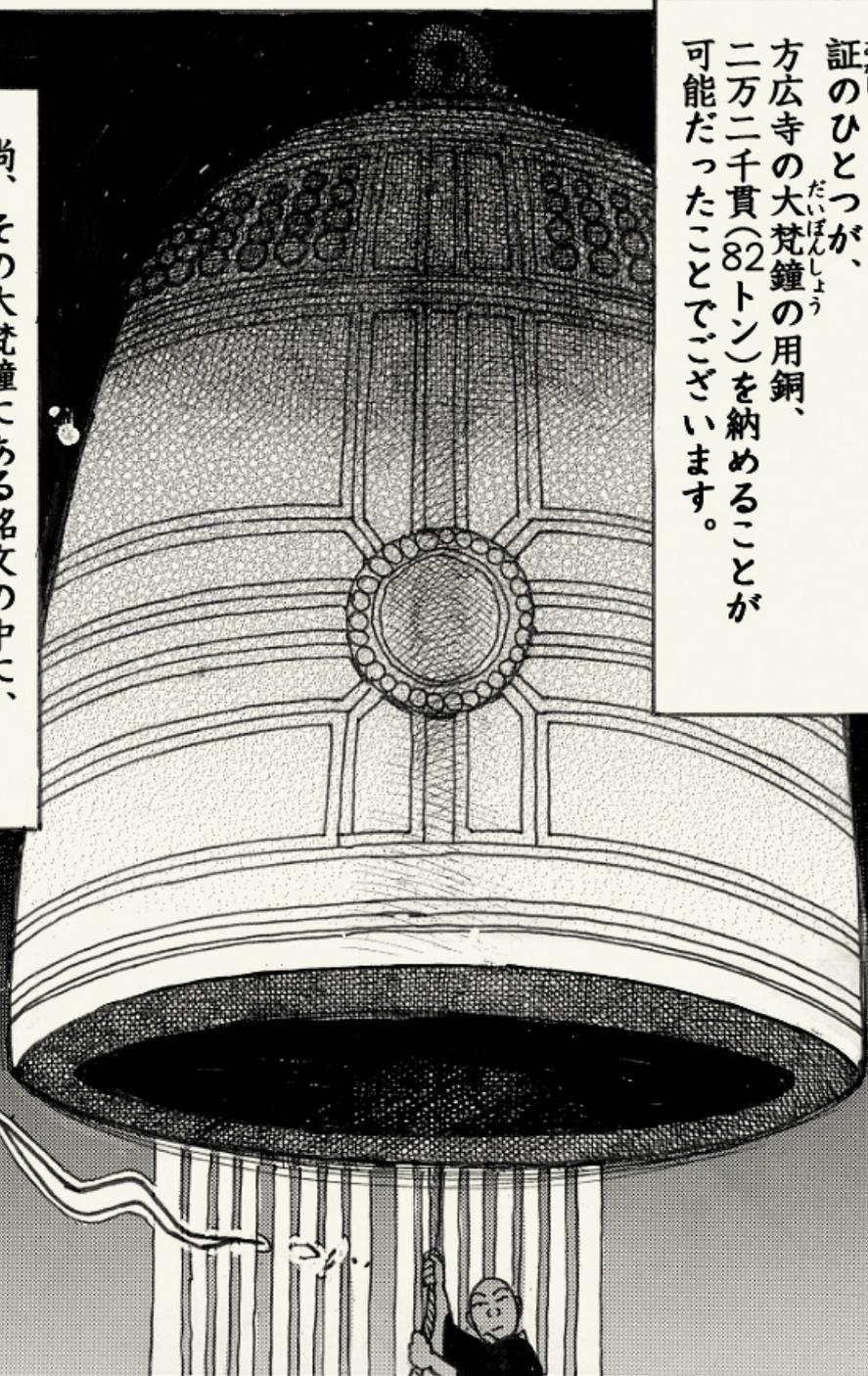
この蘇我理右衛門様は、
天正八年(1590)に、
京都寺町通り(松原下ル)で、
銅吹き業をお始めになり、

慶長元年（1596）は、「南蛮吹き」といわれる、銀・銅の吹き分けの革新的な技術を実用化された方で、その後の住友の事業基盤と発展に大きく関わることになるのでございます。



その蘇我理右衛門様の銅吹屋「泉屋」が当時、京において…いや、日の本において、如何に大きな存在だったかという証のひとつが、方広寺の大梵鐘だいぼんしょうの用銅、二万二千貫（82トン）を納めることが可能だったことでございます。

尚、その大梵鐘にある銘文の中に、「国家安康 君臣豊楽」の八文字があったがために、豊臣家滅亡を導いた、大坂の陣を引き起こしたことは、どなた様も御存知だと思います。





雷の光は、田の稲を
豊作に導くもの故、
稲妻と申します。

いま旅立つ我らの心に
稲妻を浴び、
実りある東下りと
なりませうぞ。
お上人様。

うん。
その通りじゃ。



お見送り、ここままで
結構でございます。
雪が降って
参りました故に。

あつ…。



こうして及意上人様、
文殊院様の一行は、
元和三年の年の瀬も
押し詰まった
十二月二十六日に
京をお立ちになり、





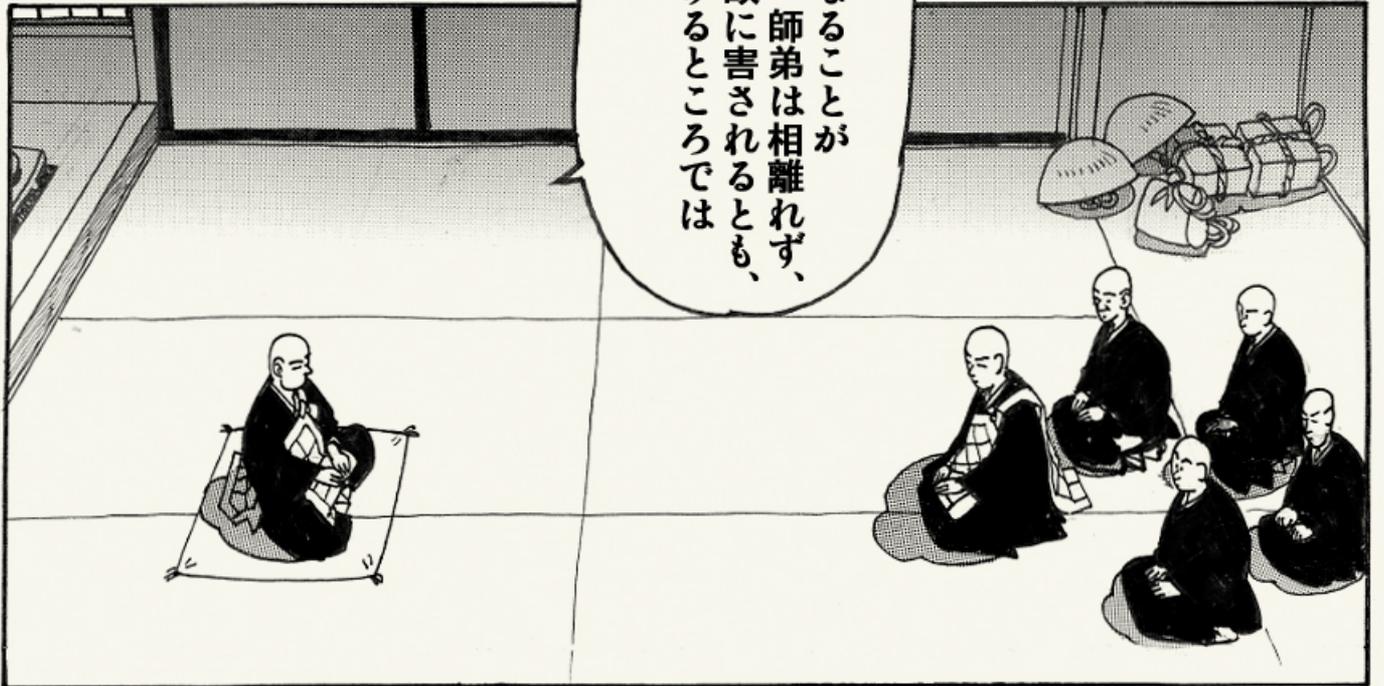
元和四年の新年は
三河の岡崎で、



そして、正月十一日、
江戸にお着きになられ、
まずは呉服町に宿をとられ、
及意上人様を中心に、幕府の
評定に挑もうとされたのです。

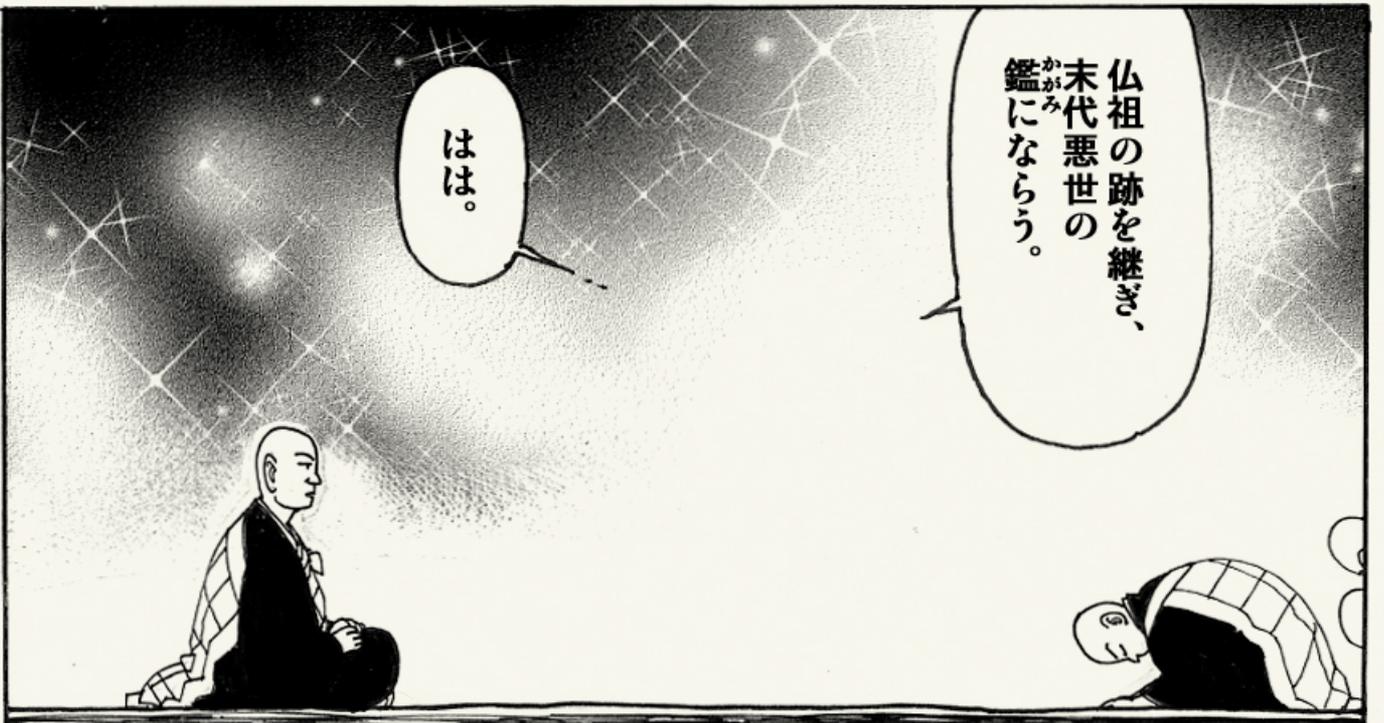


たとい
縦令如何なることが
あつても、師弟は相離れず、
我が法門故に害されるとも、
元より悔ゆるところでは
ない。



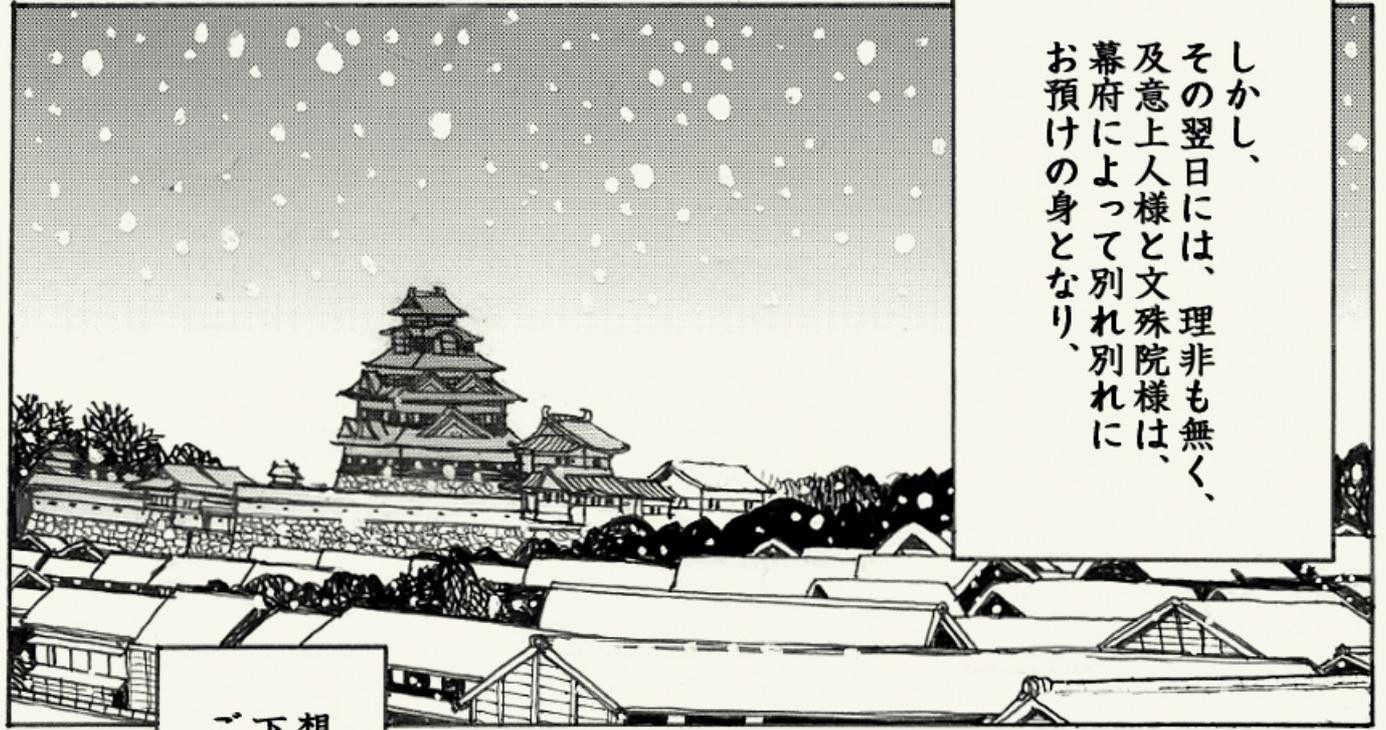
仏祖の跡を継ぎ、
未代悪世の
鑑^{かがみ}にならう。

はは。



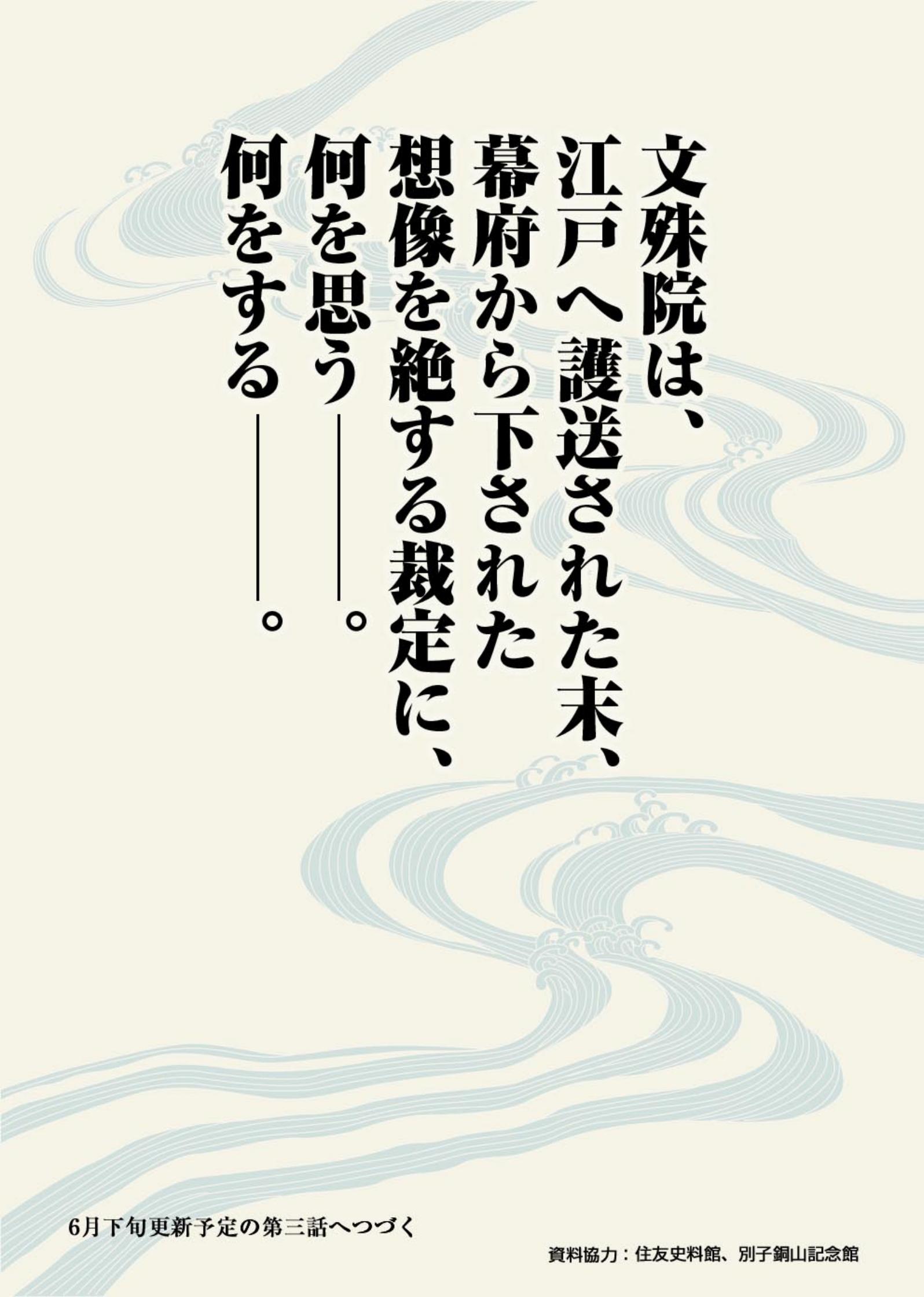
しかし、
その翌日には、理非も無く、
及意上人様と文殊院様は、
幕府によって別れ別れに
お預けの身となり、

想像を絶する裁定が
下されてしまったので
ございます。



そして、そのことで、
文殊院様の人生は大きく：
大きくお変わりになるので
ございました。





文殊院は、
江戸へ護送された末、
幕府から下された
想像を絶する裁定に、
何を思う。
何をする。